

■岩崎弥之助 海上輸送の主導権争いによる疲弊で、兄弥太郎が死去するも、和解で乗り切り、三菱財閥の根幹を築いた。

いわさきやのすけ

尊徳報徳論・1851＝ 土佐国安芸郡井の口村で、岩崎弥次郎の次男に生まれる。

ペリー来航・1853＝ 2歳：

家は地下浪人であったが、兄岩崎弥太郎が奮闘して、

桜田門外変・1860＝ 9歳：

遣欧使節・1861＝10歳：郷土の家格を得た。

大政奉還・1867＝16歳：高知藩校{致道館}に学び、

明治維新・1868＝17歳：

戊辰戦争終・1869＝18歳：大阪に出て、儒者重野安鐸の{成達書院}に入る。

学問のすすめ1872＝21歳：兄の勧めで、米国ニューヨークに留学、1年半余で英語をマスター。

明治6年政変 1873＝22歳：父の死に逢って帰国し、三菱商会に入る。以後、兄を輔けて創業期の三菱会社の経営に力をつくし、

佐賀の乱・1874＝23歳：後藤象二郎の長女早苗と結婚。台湾出兵の軍事輸送を受命、大阪より東京に移る。

初の民間工場1875＝24歳：長女が誕生。上海定期航路開設、第一船に搭乗し上海に赴く。海運振興のため政府より命令書。

西南戦争・1877＝26歳：西南戦争に際して軍事輸送を受命し、長崎に赴き指揮をとる。

大久保暗殺・1878＝27歳：

琉球処分・1879＝28歳：長男小弥太が誕生。

・1880＝29歳：三菱為換店を設立。

明治14年政変1881＝30歳：捨て身で弥太郎を説得し、のちに多角化路線を展開する重要な布石となる高島炭坑を買収。

この間、郵便汽船三菱会社は政府の後援する共同運輸会社と海上輸送の主導権を争い、激烈な競争を展開していたが、

秩父事件・1884＝33歳：強いリーダーシップを発揮して、工部省長崎造船所の払い下げを受け、

内閣発足・1885＝34歳：三菱製の最初の鉄船「夕顔丸」が竣工。*兄弥太郎の死去で社長に就任すると、名を捨て実を取る采配で両

社合併による巨大海運会社日本郵船誕生により終結させ、海運事業の一切を新会社に移譲して会社を閉鎖。

帝国大学始・1886＝35歳：三菱社に改称、経営の中心に鉱業を据え、中小炭坑や金属鉱山を次々に買収。積極的な設備投資を行い、新技術導入により、生産を飛躍的に伸ばして行く。

国民之友始・1887＝36歳：若い頃から学問を好み、蒐集してきた書籍・古美術品を収めた文庫{静嘉堂}を自邸に設置、

帝国憲法発布1889＝38歳：新入・鯉田炭坑を買収、筑豊の炭坑経営に乗り出す。

帝国議会始・1890＝39歳：東京丸ノ内の官有地を取得し、洋式事務所街の建設に着手。帝国議会開設で貴族院議員に勅選されるが、

足尾鉍毒始・1891＝40歳：辞職。井上勝と岩手県に農場を開設(のち小岩井農場)し、家政改革に着手。

1892＝41歳：

郡司千島探検1893＝42歳：*商法の実施で会社を改組して{三菱合資会社}を設立、社長を兄弥太郎の長男岩崎久弥に譲り監務となる。

日清戦争始・1894＝43歳：丸の内に三菱第1号館竣工し、三菱合資会社の本社を同館に移す。

日清戦争終・1895＝44歳：第百十九国立銀行の業務を吸収して、三菱合資会社に銀行部を開設。以後、日本初の損害保険会社{東京海上}と生命保険会社{明治生命}など、金融サービス事業も展開。

白馬会・1896＝45歳：男爵を授けられ、*首相松方正義の要請により第4代日本銀行総裁に就任。

八幡製鉄始・1897＝46歳：*あたかも日清戦争後の反動不況期に際したが、施策よくこれを取り切り、

金本位制への転換に際し、円滑にこれを実施。

日銀最初の買いオペレーションの断行、本邦公債の海外募集などにも顕著な事績を残すが、

子規句歌革新1898＝47歳：*蔵相松田正久と日銀の公定歩合引下げ問題で意見を異にして退任。その後公職には就かず、

教科書疑獄・1902＝51歳：気楽な立場になって、欧米を旅行。

日露戦争終・1905＝54歳：

満鉄発足・1906＝55歳：恩師重野安鐸の修史事業を後援して「国史綜覧稿」十冊その他の史書を刊行。英国留学から帰国した長男小弥太を三菱に入社させ、副社長として従兄の久彌社長の補佐役にし、

韓国反日暴動1907＝56歳：東京慈恵会顧問となる。(静嘉堂文庫の核となる)清国の学者陸心源の蔵書4万余冊を購入して、

アラクイ創刊・1908＝57歳：病没した。